長期入院となった思春期・青年期の退院支援

～多職種での患者・家族の関わりを通して～

医療法人社団 五稜会病院・看護部

鈴木　美伸、本多　健太郎、土屋　由美子、鈴木　大輔、吉野　賀寿美

はじめに

療養病棟では入院が長期化する思春期・青年期患者の退院支援に苦慮している。今回、退院支援に繋がった経緯を多職種の介入ポイントと本人・家族の変化のきっかけは何かに焦点をあて1事例を考察したので報告。

ケース紹介

A氏　20代　男性　広汎性発達障害

キーパーソン＝母親。両親は離婚。妹と不仲。

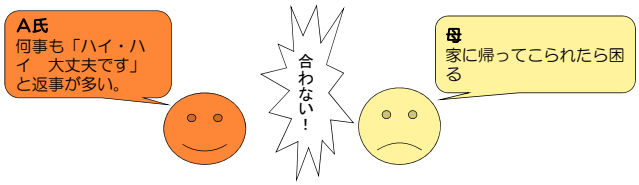
- 思春期から摂食障害や幻覚・妄想により入退院を繰り返す。
- 今回、興奮状態となり危険行為に至り急性期病棟に入院。
- 急性期病棟入院中に疾病教育や心理療法を実施したが退院に結びつかなかった。

療養病棟での経過① ～両者の意向が合わない時期～

出来事

退院したい場所が二転三転する。女性患者と距離がとれずに苦情,ケアホームの見学。

「洗濯できてます」と話すが実際できてない。



多職種での介入

医師：社会性の必要を指導。

看護師：生活への援助。関係作り。ケアホームの見学付き添い。セルフケア能力のアセスメント。母の思いを傾聴。

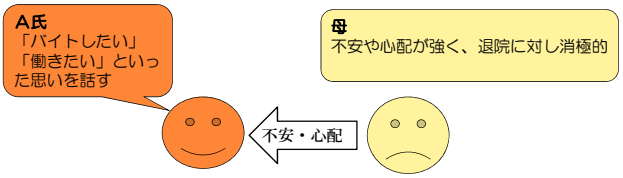
ケースワーカー：住居探し。障害福祉サービス認定調査。

専門看護師：アセスメント・自己表現の練習。本人と病棟スタッフの橋渡し。

療養病棟での経過② ～目標が見つかった時期～

出来事

自ら意見・要求が聞かれる。デイケア体験通所。カフェインを過剰摂取。廊下で喫煙。



多職種での介入

医師：退院を視野に社会との関わりを促す。

看護師：本人の意向を確認する。支持・受容に焦点をあてる。多職種間の調整。

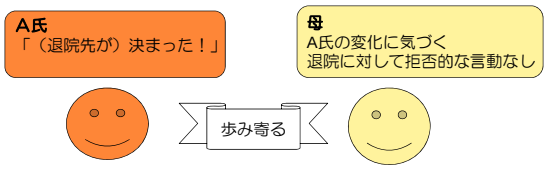
ケースワーカー：母との連絡・調整と現状説明。見学付き添い。

専門看護師：個人面談による生活に視点をあてた精神療法。

療養病棟での経過③ ～退院に向けて前進した時期～

出来事

グループホーム試験外泊。作業所見学。入居・通所先の決定。



多職種での介入

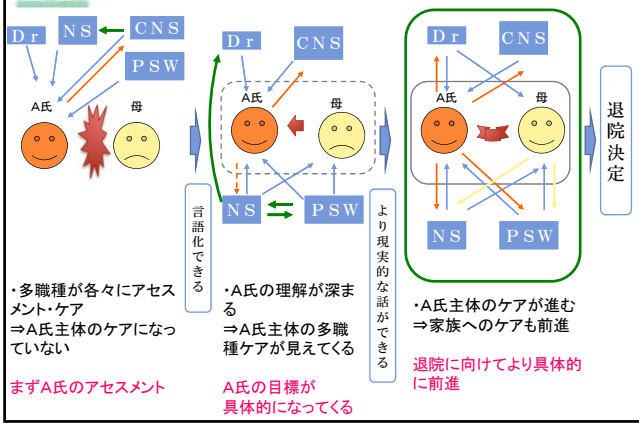
医師：親子での面談。本人に対しての社会生活の指導。

看護師：本人の意向を確認する。支持・受容に焦点をあてる。

ケースワーカー：母との連絡・調整と現状説明。見学付き添い。

専門看護師：個人面談による生活に視点をあてた精神療法。

考察



・多職種が各々にアセスメント･ケア
⇒A氏主体のケアになっていない

まずA氏のアセスメント

・A氏の理解が深まる
⇒A氏主体の多職種ケアが見えてくる

A氏の目標が具体的になってくる

・A氏主体のケアが進む
⇒家族へのケアも前進

退院に向けてより具体的に前進

まとめ

退院支援において患者と家族の目標を具体化していくアプローチが必要である。

目標を具体化するには患者と家族に多職種で関わる必要がある。

今後も患者目標を明確にして多職種で退院支援していきたい。